

鯨と博物館

矢島孝昭（金沢大・教養・生物）

Whales and the Museums

by Takaaki Yajima

文部省の在外研究で、欧米の臨海研究所に滞在して、潮間帯生物群集の調査・研究交流をはかった折りに、各地の自然史関係の博物館などを訪問する機会を得た。その際に写した鯨類関係の展示などのスライドを上映して紹介するとともに、私自身が受けた印象などを話す。

自然史博物館の主役といえば、大型恐龍の全身骨格標本であるが、伝統あるアメリカ合衆国では、それにジオラマ展示が加わり、鯨類は脇役といった存在である。しかし最近の鯨保護のうねりは、各地の鯨ウォッチングを盛んにし、モンレー・ベイ水族館のように、新しくできた施設では、鯨類の展示にも力を注いでいた。

一方、ヨーロッパ各地の自然史博物館でも、大型恐龍が主役であるが、各種鯨類の全身骨格標本などが展示され、解説も行き届いていて、Natural historyの伝統の重さを感じた。

鯨類専門の博物館としては、アメリカ合衆国ワシントン州の沖合にある諸島の一つ、サンファン島のフライデー・ハーバーの施設を訪れた。

ここは、こじんまりとした鯨類博物館であるが、近海に出没する鯨類の分布や背びれを目印に個体識別をし、シャチの3～4世代にわたる家族関係を作成したりと、地道な研究と啓蒙・保護運動が進められている。

しかしアメリカ合衆国では、この博物館やサンフランシスコの海洋博物館、スミソニアン国立自然史博物館などで目にしたことだが、鯨油やマッコウジラの歯に施した彫刻などが麗々しく展示してあり、この国の19世紀に隆盛を極めた捕鯨の歴史と現在の鯨保護との間に、博物館を通じて何ら脈絡を感じる事ができなかったのは、如何なものであろうか。

現在、商業捕鯨の全面禁止が国際的となっている。しかし単純に捕鯨賛成－反対という二極対立した考えではなくて、例えば日本海には、どのような鯨がどの位いて、それらの分布は季節的にどうなっているのか、何を食べているのかなどの生活史や生態のみならず、ヒトと鯨との文化的な関係などを、広く民間の協力を得ながら研究することの必要性を感じた欧米の博物館巡りであった。